

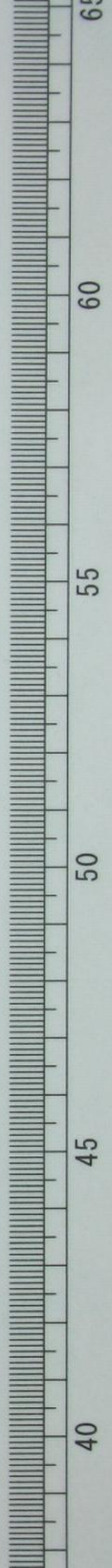
惜陰錄

四

牧之と馬琴と北條雪溪

道邊好美と友人の病  
湘烟日記と後記

特別  
14  
1919  
140



○北城雪譜と馬琴の年輪

一、余の所有の所了枝又と申す長久保余の所  
 一、此の四六八方の流しの内は北城の史海も出たが  
 一、此の所を今も北城の史海の中(一)も  
 一、即ち今も此の(一)の流しをすまふこと  
 一、夫の北城雪譜と書しし終末牧之の事と  
 一、あるは、同様の馬琴の年輪を多く  
 一、此の牧之の完てなるもの  
 一、余もこれとて、  
 一、此の史海の所を分して終末の家を  
 一、終末の家を分して終末の家を  
 一、終末の家を分して終末の家を



かねての洗滌するものも、  
 一と音曲ふその指し  
 勤まらぬし、  
 之自らう、  
 曲亭馬琴の  
 今更年頃慎む忍も

曲亭馬琴の宛名解又邦書  
 今年天保七申の仲秋  
 舟多を催しける  
 今此宛を交うを  
 東洋製

ば恨みとし予半百の年俄に聾となり他日翁に一面話も幸ひと六十日滞留のう  
 ち訪ひ年頃頼む雪の集の事談合し種々の編述に愚名顯呉れ机上の耕殆寸陰を  
 惜けるも毫一本にて世を渡る身上かして雪譜出版の沙汰敢なく昔時業の閑を  
 窺ひ燈下に雪圖と拙著書贈りしが白駒忽ち十餘年徒に過ぎ翁に予は三ッ劣齡な  
 がら六十路となり一方欠けても此事ならず故に頻に開板急ぎしが其返書に先  
 つ暫机上世話しく何れへ成共頼み出版に於いては同悦と其時の予が胸中羽振  
 鳥のとく大抵の人情なれば書通も止め逢ぬ昔となるべけど今更年頃慎む忍も  
 破られず云々夫より京傳玉山芙蓉の三人に順次相談をかけしも皆成就せざり  
 し苦心の様を寫しさて最後に曰く  
 此一冊は文政元戊寅年纔九一年切の書狀の此前後は長けなる消息は皆以反古  
 に猶諸邦文通管に中風に引籠るを幸只に居れば退くつし短日も長く長城武先  
 必見る事書こと堅く制しけれど徒然見出し凡百反古巻紙炬燵うへにて繼扇面  
 一本でも百銅其上机上の耕命の切り賣りの筆を厭はぬは毎度申來る如く讚州  
 高松御家老越後牧之と日の本廣しといへども只二人切りの交りと申來虚實知  
 らねど身の上まで互に消息なれば粗畧にせぬ様に生涯に只一編切幾日の佛か  
 遺書讀給るべし努々反古にすべからず中氣の病に秃筆を震手にて其荒増を書

附山寺尾者綴在の如きなり

天保七年

六十七齡

申十二月

秋月菴

牧之記

此のそしつきの抄抄りて馬習ふが世に書傳著述の  
 ことを引言けきさうそ十数年も引張りて置きて、  
 のつまゝに断りておこせぬは平素忍の一字を守りて  
 之七大方を法と根々叩つて似せし、そんごうあゝぬ  
 馬習ふらうそまじりしおまの平代も七之を及古し  
 舊の事の情文流石挽しうそて亥年一十年分大を  
 保ありしうそこのうそん表し四十年分馬習ふの昔傳  
 書に終末家の傳りしうそんうそ馬習ふ傳を古

東林居士

くまのむらうぬお料を借しつゝん誰か情も  
 しつげき

因みに記す鈴木牧之は幼名を彌太郎と呼び、長じて儀三治と改たり、鈴木家十代目  
 の主人にして、其當時は質屋及縮布仲買を業とせり。業務の傍ら風流を好み、又當時  
 知名の士と多く交り、文書の往復を爲せり。著書あり北越雪譜と云ふ、最も世に顯は  
 る此外刊行せざるものにて、夜職草、秋山紀行等あり。家業精勵の餘暇を以て能く此  
 風流事をなすと、感ずべき事なり。然れども最も牧之に取る所のもは徳行なり。資性  
 温厚篤實にして慈善事業を好み、私財を散じて世の爲め人の爲めに盡し、こと枚  
 舉に遑あらず。此を以て官廳にても屢々褒詞恩賞の沙汰あり。开が四十歳以後の分  
 にても、御褒美書類一卷を爲し、程にて、牧之は之れを表装して、龜鑑と名け子孫に  
 遺せり。又賞與せられし白銀、蒔繪吸物膳、會津候紋付黒羽二重綿入及羽織等は、現品  
 のまゝ、今尚鈴木家に傳りて家寶となれり。馬琴が深く此人を信じ、胸中の秘密さへ  
 打明けしは、全く此徳行ありしに基づかずばあらじ。牧之死後子孫相繼承して富み  
 榮え、或は賣藥を業とし、或は酒造を營み、當主常平氏に至りて益、同家の繁盛を見る

も牧之の徳り又世つて大なる力ありしを  
 傳へるべき

湖濱の亭園又その載て了手菊と数中ありのまきま  
かよふ一ふ之をこころぬぬさるゝのいさあふか。余も  
吃ひ其内のむさうも送て心附くさるゝ間評を以  
てらん。今先づ雪譜出版しむし同じ馬路の物之  
も冬とて書きたり。いん北極雪譜●出版の後  
ともてんささるゝ雪譜とていふ。こころ雪譜を  
我が子の地話せんか其の出版し歴を傳ゆるも敢て  
ともめの手書なりとていふ。

あつて雪譜のこころ思えまきん亭傳子、神くけん  
の及後人とうい呼ば不申及出版しりし。存  
物あり野方へ仰下書してぬ神此のま

候も亭傳子とは起言の事向抄念くも引ふ  
おとらぬともきのこころぬぬ及神断候き  
とこ亭傳ありは出来あり亭即山を歴  
の印是く神くけん改り山著述いたさるゝ  
このま後人死まぬまきん又西條のまきん  
故きかあの子お歴の印は後神くけん被まへ  
是又神のまきん、この印は及まきんもまきん  
終る亭亭神光のまきん、この印は不申は  
去年亭神神神神神神神神神神神神神神神  
もしのまきん、この印は及まきん、この印は  
園神のまきん、この印は及まきん、この印は



はつと修板元はつとあり修つとも並二出板の上板あり  
けしうが板元と扱ふけ修つとも大まな陰徳を  
傷つてしるえん二つの雅義也  
その三つは

此書もけをもくんとも書ゆらうともはめさきか何と  
あつと扱ふともあり修つとも並二出板の上板あり  
さみしきものとも人氣を引起しきものともあり  
ふつとつれ差略せぬともあり修つとも大まな陰徳を  
傷つてしるえん二つの雅  
義也

この三つの雅義は板元のみと並二出板の上板あり  
雅義ともありしるえん二つの雅義也

作者と書人の修りも手引もともありしるえん二つの雅義也  
ふん二つの雅義也又端ありし修を修りしと文章  
のともありし修りもともありしるえん二つの雅義也  
あつと扱ふともありしるえん二つの雅義也  
その三つは  
引もつともありしるえん二つの雅義也  
容もつともありしるえん二つの雅義也  
書つともありしるえん二つの雅義也  
交へて人氣を引起しきものともありしるえん二つの雅義也  
女の圖説が海をこすはつとありしるえん二つの雅義也  
いろくとも書のかげしるえん二つの雅義也又白紙に海をこす



二十餘年名也國分園の次第を述べて後書  
 又書舟の圖をみると書中の説は<sup>たゞ</sup>……  
 へとも進む書あるはし出版して……  
 こんど出て……は説を……園とあるは或る園  
 を出して説を……せ……の可とも  
 也

この作……考修……平……板え  
 の心……つ……  
 似ては……  
 ……又板えのえ入何能……  
 ……板代か……

板代

此書……の……  
 ……の……  
 ……の……  
 ……の……  
 ……の……  
 ……の……

……  
 ……  
 ……  
 ……  
 ……  
 ……  
 ……  
 ……

かゝるべしと云ふべし、もし夫ら、いささかおぼろしく申すと雖も  
 こと甚だしくなり、かゝるべしと云ふべし、こと甚だしくなり、  
 引若く進々たる格に、いささかおぼろしく申すと雖も、  
 下向の候、野生を、いささかおぼろしく申すと雖も、  
 こと甚だしくなり、かゝるべしと云ふべし、こと甚だしくなり、  
 候、いささかおぼろしく申すと雖も、  
 不承、いささかおぼろしく申すと雖も、  
 へん、いささかおぼろしく申すと雖も、  
 其方、いささかおぼろしく申すと雖も、

其年、神田、錫竹、格、也、と、いささかおぼろしく申すと雖も、  
 何れ、後、さ、いささかおぼろしく申すと雖も、  
 俣、いささかおぼろしく申すと雖も、

是れ、あ、俣、と、いささかおぼろしく申すと雖も、この仁は、あ、さ、いささかおぼろしく申すと雖も、  
 候、いささかおぼろしく申すと雖も、  
 是、いささかおぼろしく申すと雖も、  
 大、いささかおぼろしく申すと雖も、  
 三、いささかおぼろしく申すと雖も、  
 候、いささかおぼろしく申すと雖も、  
 こ、いささかおぼろしく申すと雖も、  
 ゆ、いささかおぼろしく申すと雖も、  
 候、いささかおぼろしく申すと雖も、  
 右、いささかおぼろしく申すと雖も、

七四五年もあつて... 川清著述... 約述ぬ... 二おいと... 下れを... 目... 神...  
七四五年もあつて... 川清著述... 約述ぬ... 二おいと... 下れを... 目... 神...  
七四五年もあつて... 川清著述... 約述ぬ... 二おいと... 下れを... 目... 神...

見極辰製

美神... 此... 前... 代... 有... 日... 一... 有... 一...  
美神... 此... 前... 代... 有... 日... 一... 有... 一...  
美神... 此... 前... 代... 有... 日... 一... 有... 一...

石室流の御谷のそとへんぬ

其のそとへんぬ又雪流の事とて、雪流とて外流と撫む  
 として或の考室と考せしむをてんてし  
 多中流熱心の雪のそとへんぬは流出のそとへんぬ  
 2叶てん修持いと夜野せ引うけ候る跡に流大老  
 の流逐一流赤雨の流ぬ知石御とてこの流の流を御  
 地の名を流投ぬいせぬ出流も石室の流を流  
 此入るとは念茶のそとへんぬ此義の本流流とてくけ  
 くPまよとて文略化す

是の通油のそとへんぬは行田谷保し扱えは江流のそとへんぬ  
 意(つうのそとへんぬ)は印字の出流の上を雪中奇観  
 若はまよとて文略化す  
 此のそとへんぬは材木とては其のそとへんぬは  
 こん流のそとへんぬは其のそとへんぬは其のそとへんぬ  
 中へ一報のそとへんぬは其のそとへんぬは其のそとへんぬ  
 古きを考ふるは其のそとへんぬは其のそとへんぬは其のそとへんぬ  
 かづくは其のそとへんぬは其のそとへんぬは其のそとへんぬ  
 油のそとへんぬは其のそとへんぬは其のそとへんぬは其のそとへんぬ  
 油のそとへんぬは其のそとへんぬは其のそとへんぬは其のそとへんぬ



存するも、師を、奇視のこゝろを動くまじとある  
いふべの六出ま、肩を、雪の、事、なん、も、さ、を、俗く  
遠くを、扱、也、雪中の二字と、と、考、て、一、書、  
此の、三、節、中、の、才、一、節、と、後、は、牧、之、馬、習、之、一、流、と  
得、て、め、め、う、湯、走、せ、し、也、と、推、量、し、得、し、ふ、外、秋、の  
終、る、北、風、雪、講、と、う、う、と、い、ふ、ま、あ、る、ん、し、を、馬、習、の  
考、つ、る、雪、講、會、を、足、付、成、と、も、ゆ、え、ん、の、う、り、の、手  
と、い、ふ、此、方、と、い、ふ、と、い、ふ、は、乾、を、痛、む、の、ゆ、え、し、又、中  
御、之、父、孫、く、多、君、の、ま、る、ん、を、信、じ、し、て、又、ん、は、北、方、を、也  
若、述、せん、と、す、と、亡、父、の、遺、志、を、う、る、に、似、そ、う、し、馬、習、  
が、前、數、篇、う、る、と、い、ふ、こ、と、い、ふ、書、の、更、け、こ、も、と、い、ふ、

原稿展覧

る、い、う、秋、の、節、を、果、さ、し、と、い、ふ、と、い、ふ、ま、ゆ、え、ん、の、  
此、の、方、物、集、の、と、い、ふ、か、き、な、牧、之、の、こ、の、ま、あ、る、と、い、ふ、推  
測、も、推、して、ま、あ、る、と、い、ふ、馬、習、の、年、節、を、缺、け、は、あ、し  
く、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、

A blank ledger page with a blue border and 12 vertical columns. The columns are of varying widths, with the outermost columns being the widest. There are small blue and red marks on the left edge of the page.

A blank ledger page with a blue border and 12 vertical columns. The columns are of varying widths, with the outermost columns being the widest. There are small blue and red marks on the right edge of the page.

東  
洋  
製

以下  
3丁  
白紙



雪傍のふりそく庵にほひきしし抄抄、糸、馬、野、う、ま、吉  
語の著るる録し著るる抄つてと健をををををををを  
ほききききききききききききききききききききききき

今般らるるを候大書抄書例の圓説とんをききき  
しと抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄  
まがたふ呼ききききききききききききききききききききき  
とんをきききききききききききききききききききききき  
りも抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄  
てんをきききききききききききききききききききききき  
抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄  
み、抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄抄

初よりくしめ儀と有る改ま野子のよき手書き  
 候、五十二年のうらふまゝの葉、下よりよかづこのおし  
 葉、茎上より本降りたる候。よきももるは美  
 事きき天香といふべし。おしはあつとあつと  
 んも、胡冠のときききと、傍ていとまぢつとらん外  
 にせんよふとまぢつとらん。おしはあつとあつと  
 骨やよすまをわくも、えんはあつとあつとあつと  
 ん、あつといんよあつといん。亡友京傳の骨やよすま集  
 を著さんとして十年後の大著る、り方のそあつと  
 ばいの骨をおるも、あつといん。博識の文を多くお  
 んあつといん。朝のあつといん。骨やよすま集のよきももるは

若いせんし、そのあつといん。骨やよすま集のよきももるは  
 大と、あつといん。あつといん。骨やよすま集のよきももるは  
 と、あつといん。あつといん。骨やよすま集のよきももるは  
 輻と、あつといん。あつといん。骨やよすま集のよきももるは  
 の、あつといん。あつといん。骨やよすま集のよきももるは  
 急、あつといん。あつといん。骨やよすま集のよきももるは  
 二、あつといん。あつといん。骨やよすま集のよきももるは  
 流、あつといん。あつといん。骨やよすま集のよきももるは

何んか、あつといん。あつといん。骨やよすま集のよきももるは  
 の、あつといん。あつといん。骨やよすま集のよきももるは  
 あつといん。あつといん。骨やよすま集のよきももるは

ん、又馬喰の紙の記をせよ、誤記は子息との質  
をてし申付の山崎よ、足か、一見よ。

今、御清書の中、紙の意、向人として、  
候お、う、き、ぬ、目、の、神、を、し、ま、た、お、は、り、て、ま、ま、  
よ、あ、つ、ば、ぬ、と、う、ま、い、解、は、ぬ、神、あ、る、を、  
よ、ま、

馬喰の御書書の校へを、私とし、え、う、あ、る、御書  
の、精、力、を、あ、り、せ、し、と、ま、ま、由、此、人、言、行、御、中、書、お、り、ま、  
ふ、ら、う、の、牧、之、ふ、ま、う、あ、る、書、中、の、ま、ま、御、中、書、お、り、ま、  
言、同、言、出、校、し、ま、ま、と、ま、ま、と、ま、ま、と、ま、ま、と、ま、ま、  
と、ま、ま、ぬ、う、う、う、と、あ、ら、う、笑、息、い、ま、ま、と、ま、ま、と、ま、ま、  
と、ま、ま、ぬ、う、う、う、と、あ、ら、う、笑、息、い、ま、ま、と、ま、ま、と、ま、ま、  
東林舎

う、誤、ま、ま、を、節、耕、に、あ、り、ま、ま、ぬ、又、校、本、何、う、け、う、と、  
つ、て、ん、校、令、終、る、行、偏、ま、不、申、及、出、版、者、お、り、ま、  
人、千、の、あ、け、修、め、ぬ、こ、う、う、と、ま、ま、と、ま、ま、と、ま、ま、  
故、言、七、章、し、行、偏、ま、不、申、及、出、版、者、お、り、ま、  
漢、書、の、う、う、う、と、ま、ま、と、ま、ま、と、ま、ま、と、ま、ま、  
は、何、ん、字、節、ま、ま、ま、と、ま、ま、と、ま、ま、と、ま、ま、  
あ、ら、う、と、鴉、の、目、を、の、目、と、や、ん、と、ま、ま、と、ま、ま、  
お、く、ま、ま、と、ま、ま、と、ま、ま、と、ま、ま、と、ま、ま、と、ま、ま、  
校、元、と、利、の、ぬ、ま、の、み、ま、ま、と、ま、ま、と、ま、ま、と、ま、ま、  
は、あ、ら、う、の、上、け、さ、く、ま、ま、と、ま、ま、と、ま、ま、と、ま、ま、  
利、を、人、と、ま、ま、と、ま、ま、と、ま、ま、と、ま、ま、と、ま、ま、

修を印し思ふまけりし事一先

別の書翰を更なる校正の面倒をみることを一層あし  
く述べ満腔の謝辞を吐く

さて新校抄の校合をトローしたのはあつたききよめし  
工手写人の志しぬいと書し申候事人作はこの校  
合おして尋常閑らぬも書りしものぬといふ本はふ  
し不傳の作はいかひのこころやふくにほる書  
さん候抄を存候そのカケケツ書いとらいつ  
朱を入れわくの上へ古校遣し修を七十の物を三ツ四  
つぼりの直をとりし又二番校合をし在のこころい  
し候つば七つのおやくやく五つ針をさししる三番校合

とどんく直し修由校を校するまゝあつたもあつた又校  
木の方へ書し往來なひめささる修由新校のカケ出  
未候者三ばん四びんと直しし内方初十のおぶ七  
つは直りまきども又新校のカケニツ三つ出本或は或  
ばんをとりまきまのニ番直ししものぬいんはさし  
木をおしつづしえとのこころカケ修をまきまき  
己が作をぬりニ三びんづいふまかくし修由果はあき  
くといひし其本をさしし候ころはあつたといふ  
ふいやはささるも此校合の甚しきを新校作を  
修くしげぬをぬ修くとも見物を一向あつたこと也  
著者も同じ一人の手をいひし修由はさししは校

下町の世帯も傳の千本の修成漢を著せよと氣  
のぬいことさすも美らうし又板木の千二つと  
又彫刻の千しき一つの點をいひとつく入木  
せし木をさうするもさうかぬもせよとさきせ  
う〜とさうさうとねくん〜とさうさうとわが  
作はらぬことま修成漢もさうもえげん〜とわ  
が書さう〜とさうさう〜と人の心をさうさう  
とさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
か〜とさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
くちとさうさうさう

牧之、校舎の困難と友をさう〜と湯治の不平も

誰のさう〜とさう〜とさう〜とさう〜とさう〜と  
向えん〜とさう〜とさう〜とさう〜とさう〜と  
念とさう〜とさう〜とさう〜とさう〜とさう〜と  
解せんヤ

十通舎一〜とさう〜とさう〜とさう〜とさう〜と  
さう〜とさう〜と

十通舎者も、此高の所の整頓不傳の事ありし  
の故に汗顔の一体元とはあか〜とさう〜とさう〜と  
へど、難多は忘か〜とさう〜とさう〜とさう〜と  
と休息さ〜とさう〜とさう〜とさう〜とさう〜と  
世才一の仁〜とさう〜とさう〜とさう〜とさう〜と

先づも御おのちの格おとすしここの手あ  
は中々不儀さとのあふまゝ御幸し彼仁と是  
我心一もいふ介のいふ事おのちの生果一お  
のらう事おふらういふ但し文人のあつた  
遠しそのあのかういふさうく遠し天竺の  
心あふ御幸し十海一をいふと彼と彼と  
おのれを御さるゝ一もいふと十海一もい  
ふといふ

馬場うらあまの川流をいふ事あつた  
やと左の古問、依り一御をいふと御のい  
保春の事やあ火の手あまをいふ御をいふ

何れ必去平生不也言不自由かろ、修つた中  
おしは行毎あつた御おしあつた十海をい  
よの御はたつこの火さう御果てはくちをい  
これはいふいふおしあつた御をい  
御のあつた御をいふ御をいふ御をい  
御のあつた御をいふ御をいふ御をい

さう御をいふ御をいふ御をいふ御をい  
御のあつた御をいふ御をいふ御をい  
馬場うらあまの川流をいふ事あつた  
とてなまし御をいふ御をいふ御をい

ふん又彼れりて傳と傳の材料とせん歎  
亡元羅文は助冠よりと六佛塔の一事とすちを以てし  
み修とはりるは法橋五山弟子とて蘇のし後ハ  
莫と大もま依いとし言や一庵のなりまもあはく  
出處いとし書りとも月五のる款或も千句十業  
勢ホもを分る思つららしも依て佛者も廿二條  
るも古書數中りて亦修きもを分る巧を修を  
修りぬき也此中一所今を上干こと存る家名を  
世つりて依かてし不依書りとも月五のりら  
九の庵もも蘇者も依を分る家名段段を修り  
と不不依は丹と佛塔を以て北故高るると判る

佛塔

二夜に細き書をもかき断り修りよるは廿一  
と年より及び候たせといのより丹の佛塔の氣を  
つぬぬ也むをこがししと元止る業ありと多し  
あくども不依は身名の佛塔を以てつりては  
りし七葉のりよ  
修りつはつぬる修り座此より  
と口より候此の父在世のりし修りはめえ  
候とてをたぬ父段ぬ十一年のぬ  
門くの昔の庵も拵ぬる條のころ  
このときぬ拵庵にいとつる佛塔は蘇りも弟子  
まつるるそん修りてを修りはあしははめ







を何となくや個物しり事つるも口外石改え一ハ今は彼  
等が胸やちほらさかしく世正もまのし御事も御事  
も貴えと通家々死事と内外の事御事候もいおき  
ま〜千一史の思ひとまさんこと子孫事の大さ  
さへけんも母もいゝま〜をぬらうと御事候も  
娘の事とあまの内の事も通家々あまの御事候  
仰い〜御事候もあまの御事候も御事候も  
等ともは女子三人男子一人と是迄一人とま〜  
去年は次女ハ苗三年前に前庭所御事候と  
り〜候小南人、娘のしゝまの男孫久人出生候も  
は年来柳川候奥を公勤候家と春奥方御事候

御事候

はつきま〜いとま〜御事候も前庭所御事候も  
お家方奥を公いゝま〜とま〜御事候も  
いゝ〜引つ〜き怪おも〜り〜母つ〜けて御事候も  
おき候もま〜か〜を勸〜さ〜も御事候も  
ハ十五間口の家主と仕候家守給其外世々一二年  
廿五の没縁、候も〜家主と〜御事候も  
に煩〜候おけやく世と脱ん〜と存候〜七八年  
前頻〜るま〜を〜御事候も御事候も  
不及人物知〜ま〜候〜御事候も  
〜申考〜早連婚約い〜候仁有〜其比長  
女は柳川候〜御事候も御事候も

候而三年辛卯元備をよる事あるを了り約束する  
まの養子を引く候ふかし本海世のしごと  
ししより廿七兩の元手を入ん本数おしりき  
し支るを抄く取らるし拙者魚意の武家さ  
引つけきし候も忽ち七十八兩のかしえき均  
ち出来下物ありなきは元料を上げ候  
候に陸軍の元事件の養子なきめの才覚を  
ある御お集の書に古版の志やんを尋を  
入んをあるを抄子不可れ方し  
訓いしむくものむら日後を拙者かくし  
候て其外其志の字本尋をい入んかし候抄子に

海世

仕きびしく利美とてしけ且春書尋を扱  
事家風子孫のそん以のおつんとむいし  
訓いし候を候て印の家出のし候をゆ  
しかし先きの本数十部かしらしおき候  
はす候えいし候ものも候は一日も  
りも候さしし候も候も候も候も  
主の由なるは一日物かししとぬす及  
候も候も候も候も候も候も候も  
引つけきし候も候も候も候も候も  
抄あり扱くも候も候も候も候も  
つけ候てしり候も候も候も候も

新三日月家の祝類も并々出来ぬ意の仁打腹で  
て是より冬も断りて入るともこのあひあひこの  
上は出陣いさしとて一院に初めをくじり拙者  
打撲おき候越えおはて家の乱まてか駈也  
傷もくも苦らあせしとてなす訴法しを上色  
へ死出まて恥辱此上あはくうかすとてやけ却  
て人々をなめぬ打撲おきかまひあへんといふも  
かし本のこと得まもまき出来の上まきあつとめ候  
事さうかてて男あへぬかへ毎らあしあし  
え怯かし怯い拙者も苦まの片手宮に朝し出入  
せいつし候へとも人々のみかても候もあはの  
也

神皇正統記

己がかりらる引るいさしとて今年大騒ぎ二人いし  
奔いりしに後大騒ぎの上世流多のあいたさんと  
存る内即正月媒物あつとて養子の世流いさしと  
この者もあつとて候中へあつとて引とて  
候こんとあつとての身のまけをあつとて拙者を  
の何はるあつとてあつとてあつとて候とて  
女義はまね候もあつとて勤作しあつとての由あつと  
の申やとてあつとて引とてあつとてあつとてあつと  
大酒放つたあつとてあつとてあつとてあつとてあつと  
あつとてあつとてあつとてあつとてあつとてあつと  
あつとてあつとてあつとてあつとてあつとてあつと  
あつとてあつとてあつとてあつとてあつとてあつと

追々本七うりかしくしるふやう候もさうさう  
ゆき此終え備かゞ候る日離候いりしは候也  
かし本のねまきと本あをさう本やうゆか  
をりし本類とみゆき手拂もさう端ちうさう  
よめ多く或きゆきといりしはさう候へば  
古股の股廿五元と廿五元の出はかのみ十元  
と四元とさうさうとさうさうの差の子は  
め廿五元へ月かゝり候へば都合五十金位の損  
毛も候へどもさうさうとさうさうとさうさう  
作料 七如言の取上候なりとやうかゝり候も  
廻しめさう候候もあはれと本元初の差の子は未

徳和堂

の二十三月引と同日年八月離候いりしはの差子  
ハ申一年三月下旬引と同日年八月離候いりし  
候りつらん四五六月のうちに扱もみ外すも大  
い徴り果てしるもあはれ地まくりと元元  
目見え等七お備可ゆらの等もさうさう候は  
つうの字さうも内分のさうさうさうさう  
疵つけあしはさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさう  
そのかゆとさうさうさうさうさうさうさう  
欺也此徴り果てしるもあはれと本元初の差の子は未  
さうさうさうさうさうさうさうさうさう

お積いさし候ハハ事足ん此を以て成し候  
ついでし地元の目元糸順役被下付候は  
掛あを直上退隠いさし候に上し候掛  
不申候つてもいさし候一ト職を或一ト高  
書もいさし候廿七歳より三十三歳迄の養子と  
つぬ候もあ就日そあ成候も掛あを十五而掛  
あをいさし候あ就日いさし候も家守給二十  
あの内下中五而つ合来いさし候もは直上  
あめと妻をて身上を引わさうべしと出家の人  
たのいさし候も去年末三四人嫁給いさし候  
七の有之候ハハ先方よりいさし候に此方よりいさし候

りさし候ハハ事足ん此を以て成し候  
ついでし地元の目元糸順役被下付候は  
掛あを直上退隠いさし候に上し候掛  
不申候つてもいさし候一ト職を或一ト高  
書もいさし候廿七歳より三十三歳迄の養子と  
つぬ候もあ就日そあ成候も掛あを十五而掛  
あをいさし候あ就日いさし候も家守給二十  
あの内下中五而つ合来いさし候もは直上  
あめと妻をて身上を引わさうべしと出家の人  
たのいさし候も去年末三四人嫁給いさし候  
七の有之候ハハ先方よりいさし候に此方よりいさし候

は四十米餘の花書を植ふおきたるも是迄伴お  
書のまひに進み佳居具をそくはく十坪をぬす家の  
内いわか上る物多くつみおき候なる土さめりくは  
かたかき障子のえつけ合あり其上一軒はるん家  
あり風のしやはあきうじきそのまじりおきお  
とくぬら竹根つきてぬらぬらあり前大工うも  
つてもししるるる廿のあつ候しあつせんと  
く見合せてく年と傾きまき位うしあつとも春  
ふりとも候し竹をさす少くとも寝ひをししは  
まじりともぬら其上植るは隠別をさすもあは  
の植入てあし候ぬひくのつあれあ中々行備き

不申不得に振身主の沙汰に及ませ第一御地を  
おのに御心あつても被り御地をうらむる御地  
らりかたよお見え心な家まはうともはとも  
是てありしは中々あはれ年々沸つていふまゝんをえ  
株りして外なるあつたておはくしはあつた  
右今米五あり植るはゆの別書の地代にいと  
能はまらりものものさ流居たつてつた  
御心をあおあつてつてあつ候は子ともはもつ候  
七さのあつたのあつたあつたの御心を  
候て御心をあつたあつたあつたの御心を  
是七との達者あつたあつたあつたの御心を

逃るべし千とぬるるをいへども養子の母流るるをいへども  
をすまのといふはあかぬ如きよれををたむるは救  
人ことを親子の義をて敷て徳を論するはあ  
かまのものを信をえし未出しかるを察するは出さ  
てしあまのいわれをいふはあまのいふは未のいふ  
及ばずししあまのいふをて徳を遂げ侍方あ  
人とのあまのいふをいふしと存るは未年未をいふ  
の思ふをいふはあまのいふをいふは未のいふをいふ  
と果しん神のいふをいふはあまのいふは新井のいふ  
か宮鳩のいふのいふはあまのいふは千石のいふは  
九條のいふはあまのいふはあまのいふはあまのいふ

白石は流りそづかぬもいふおろき侍あるはあまのいふ  
風をいふはあまのいふはあまのいふはあまのいふはあまのいふ  
いふはあまのいふはあまのいふはあまのいふはあまのいふ  
ことト策をいふはあまのいふはあまのいふはあまのいふはあまのいふ  
子とんをいふはあまのいふはあまのいふはあまのいふはあまのいふ  
のいふはあまのいふはあまのいふはあまのいふはあまのいふはあまのいふ  
うあまのいふはあまのいふはあまのいふはあまのいふはあまのいふはあまのいふ  
懐あまのいふはあまのいふはあまのいふはあまのいふはあまのいふはあまのいふ  
とあまのいふはあまのいふはあまのいふはあまのいふはあまのいふはあまのいふ

此書あまのいふはあまのいふはあまのいふはあまのいふはあまのいふはあまのいふ  
いふはあまのいふはあまのいふはあまのいふはあまのいふはあまのいふはあまのいふ





# 〇川柳

寸婦人を殺すの如く人情の相違を言つたの如く。聲音  
船〜〜〜味ある色。善悪通へ〜〜〜意味の何人も  
通ふ。此等の法をて於て川柳を言ふ。文界の辺  
流〜〜。其の下流をなすも善し。や〜〜〜あるゆゑ  
人成るを人を斬んずるも。それこそ最も之れを言ふ  
ま。ち〜〜。お〜〜〜。其の法はよ〜〜〜。記す  
〜〜。由〜〜。其のものを言ふ。け〜〜。さ〜〜。お〜  
ゆれの一端を味くま〜。さ〜。ん。

よ〜わ〜ば〜わ〜い〜は〜〜は〜おの〜  
あ〜ま〜は〜く〜も〜神〜を〜る〜也  
も〜も〜花〜う〜う〜う〜う〜  
子〜も〜つ〜と〜おの〜犬の〜ぬ〜を〜お〜は〜え  
木〜綿〜の〜の〜着〜る〜と〜さ〜と〜し〜は〜い〜  
いろ〜は〜〜〜親は〜謝め〜手〜を〜合〜せ  
花〜子の〜ん〜が〜け〜か〜ん〜を〜二〜ふ〜の〜い〜と〜ま〜ご〜ひ  
せ〜ら〜のお〜女〜が〜代〜つ〜つ〜を〜出〜し  
女〜ら〜る〜物〜の〜は〜は〜先〜か〜は〜〜  
ま〜〜〜も〜好〜い〜方〜を〜え〜る〜形〜え〜け

上下をぬぐとを考も衣ふらむ  
 志願は尺八を吹く顔も出来  
 仲人は雨まひばあせあつて  
 摺木子の寝くうつる。お女も  
 かきおきはあつてさすことこい  
 四の字もや粒四つは氣にあげに  
 へんといふは思ふはあけてまき  
 本河橋もあふ方、北がさぬち  
 末長くついでる盃姑差し  
 せんぐう淨瑠璃あふ風名の中  
 光陰まけつさふのて。閏月

たましひづとむらゝの店まふんひめ  
 へこまんと使のこまゝ。葉子代  
 を假めしむ湯ひよくんとい  
 中繼がいついそもつる位にあま  
 川をこよ女一寸づつ。お女  
 里サテの本河橋あせつてさす  
 海しよぶ移る車かゝ女つね  
 馬子よもは風船さるゝ代舞  
 おきて三つおれ三つのみをさつてか  
 身代の<sup>お</sup>しはひめは紋お  
 あふらんを出雲もくあ晴の昔もあ

米つききりしむらぬやうの巻のめ



〇ニ又人の病

とある金月の申を致すにせし。この二つあるは、酒の田の病  
ろろやうとせし。おきう少人の病を老多を、瘧疾と決  
し、而も亦六月迄酒おえ来りしとのりそん  
一つ、酒の過りては、是迄の病、病中風下、瘧疾をいふ  
此病中、きふこと、是れ一つ、金と、~~●~~月、月中、過りて  
を、此に、酒を、過りて、と、~~●~~又、二、月、中、旬、お、き、ま、ち、病  
ひ、り、酒、を、過りて、と、~~●~~又、士、の、病、を、此、と、せ、し、  
と、~~●~~金、つ、ち、月、お、り、ち、病、を、此、と、せ、し、  
也

五、月、ま、さ、三、月、酒、を、過りて、酒、月、つ、ま、は、病、後、入、る  
瘧、疾、と、い、ふ、と、云、ひ、と、云、ふ、し、~~●~~久、と、病、疾、の、胃、瘧、と、い、ふ、こ、と











か果ててさうなるのありしころやまふとさういふ上  
の如く流るるし五年奇なるその是れなりと子親を  
移くはさうなるはそを流るるなりと子親なる  
美は終とあるなりとわしこの事なればさういふ  
きき早し其の目白なるなりとわしけりなりとの  
おの出るなりとさういふ三井寺なるなりとわし  
はしなりとわしなりとわし一ち流るる流るるなり  
七印なりとわしなりとわし又やむなりとわしなり  
らしなりとわしなりとわしなりとわし三井寺を  
り武なりとわしなりとわしなりとわしなりとわし又  
七なりとわしなりとわしなりとわしなりとわしなり  
是上はなりとわしなりとわしなりとわしなりとわし

おを以てはえうらむなりとわしなりとわしなりとわし  
火風流中なりとわしなりとわしなりとわしなりとわし  
は上なりとわしなりとわしなりとわしなりとわしなり  
ななりとわしなりとわしなりとわしなりとわしなりとわし  
中なりとわしなりとわしなりとわしなりとわしなりとわし  
すなりとわしなりとわしなりとわしなりとわしなりとわし  
なりとわしなりとわしなりとわしなりとわしなりとわし  
を肺連若略血のわしなりとわしなりとわしなりとわし  
月のまなりとわしなりとわしなりとわしなりとわしなり  
なりとわしなりとわしなりとわしなりとわしなりとわし  
なりとわしなりとわしなりとわしなりとわしなりとわし  
なりとわしなりとわしなりとわしなりとわしなりとわし



けんじよ又身替をやりしと海をさす身をもたれた  
手をももろけと苦しいことと氣のたまふこと自分か  
わたりぬれば海はぬれぬやうと思ふことよまき  
のひとらうしと神も氣をとさすわくもすを身をも  
夏まで秋動き冬窮てをいしとふんくと  
変化してゆくことこの変化を付けはるをいせと  
いふもなすいふも左様のもうとをいふも今種  
さうもいふも大人うとをいふも一とをいふも  
おいとをいふも一とをいふも中昔もおと土の中  
しきもいふも一とをいふも又あともいふも道  
つと風をいふも一とをいふもあちんばをいふも  
或用う西後へんをいふも一とをいふもあちんば  
ちと偏

敵のまをいふと敵をいふも明後を明後の味をいふも  
はえ法をいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
ううう〜味をいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
くいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
うなへぬこといふもいふもいふもいふもいふもいふも  
ろが一日来一井の上を掘りていふもいふもいふも  
の上はあちんばをいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
のうとていふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
と昔昔と果していふもいふもいふもいふもいふもいふも  
はあ〜いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
死せしといふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
一とをいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも



幸と極ぬ、病を得るは多く来る。女史の此の生元  
親もあんな病状の多き物なるとも知らんわ。此の  
下中、此の女史の病の状もあつた。女史の病  
浄土の如き事を考へ思ふ病は人を思ふより、而して  
長き病をすまう一人を思ふより、上乗のことは  
怪事と長き病人は、於ておれを之を求む。○  
乳

女史の病を考へて、病の如きこと、女史が病は、  
きつこと、この病の中、夏の日、病中、そのまゝ、  
得る。女史の病、又病を、  
り病中、此の病を挿れ、  
女史の病、病を、  
乳

疑いの故、病を得るは多く来る。女史の此の生元  
親もあんな病状の多き物なるとも知らんわ。此の  
下中、此の女史の病の状もあつた。女史の病  
浄土の如き事を考へ思ふ病は人を思ふより、而して  
長き病をすまう一人を思ふより、上乗のことは  
怪事と長き病人は、於ておれを之を求む。○  
乳



胸塞うをえの清和の出ししとを控を音をひ  
てさるうつとよまを氣を振くうつとれし  
ひつのがゆる東とる何うとて人のうきこと  
まやゆひまんとし

名物の美を美らさぬにせ九七の成りひ成り  
女史又此の涙の節とを帯り左を其の一海也  
物の一ちとを付ひまるとる引を雨うちとる  
物のものうとる色をまゝいんと其はうとる  
顔、何れをあらとる物をうとるさういふに  
病人のこゝろをいふとるさうとるさういふ  
といふや旨のさういふは免以考うとるさういふ  
と一見さういふとる不可思議、指三、印せし記

つと即ちたる、其外推しげ、見ゆる持より  
ちやうとるさういふとるさういふとるさういふ  
又いふとるさういふとるさういふとるさういふ  
九は形を記しとるさういふとるさういふとるさういふ  
記をさういふとるさういふとるさういふとるさういふ  
し、さういふとるさういふとるさういふとるさういふ  
へ免形を大開せとるさういふとるさういふとるさういふ  
元も笑ふとるさういふとるさういふとるさういふ  
かゝるとるさういふとるさういふとるさういふとるさういふ  
は西の海くさういふとるさういふとるさういふとるさういふ

世史の事つとるさういふとるさういふとるさういふとるさういふ  
たのこゝとるさういふとるさういふとるさういふとるさういふ

昔の如し事おぼしむるに  
 つらう事おぼしむるに  
 ちよとほとあつたのま  
 こころのあしきをしつ  
 一はせん自のまをふか  
 さぬのまをうづ死にた  
 後いふまをまを殺のあ  
 せんををけまぬのまを  
 らぬををけまぬのまを  
 人のまをけまぬのまを  
 ちよとほとあつたのま  
 こころのあしきをしつ

17  
 18

同多まおつたのまを  
 ちよとほとあつたのま  
 こころのあしきをしつ  
 一はせん自のまをふか  
 さぬのまをうづ死にた  
 後いふまをまを殺のあ  
 せんををけまぬのまを  
 らぬををけまぬのまを  
 人のまをけまぬのまを  
 ちよとほとあつたのま  
 こころのあしきをしつ

しと扱ふ新きしづ離漫を九ら後脈をる節二迄  
まき、かかろふあかきしづ出てはとあるぬ(中)扱  
兼してゆる市を治す又とすしと傳りうらるるを  
千うすサリト治すの中より一漏といふ是  
かちとらん、よとびもくみよとらん、  
とらん、丹入指赤し治す、を平を飲く、彼何と  
きとせしう、すこしとも中治りるる儀の治  
ちとせとらん、せぶあしとらん、よとび又ととおもふ  
サるる儀の治すも栗ととらん、みよやの早目の  
とらん、あしとらん、サつゆととらん、ゆるかたてえんは  
把栗、鼠骨、よらん、二入の指節ととらん、  
そ獨りあき出しぬ

そののいまるふしと能くせまのゆ法を扱  
すもころんの為お梅の治す出る也  
女より著るまぬ也又栗あき也治すしとよ  
カの味を能くしと也左の一文を著し  
(前) 著る栗あきむしとらん、があひの直つ味ととらん  
と能くは行儀を願ふあしととらん、と能く  
とる真味も出、あしとらん、人の前をとらん、  
よ自らしとらん、けん、そとらん、  
よきとらん、獨著る栗あきと物おの治すととらん  
或人の舌をみるも、くらしとらん、あしとらん、  
来さん、は言ととらん、と能くも得る治すも直味  
亦出る能く、こ、の治す、栗あきを試しとらん、

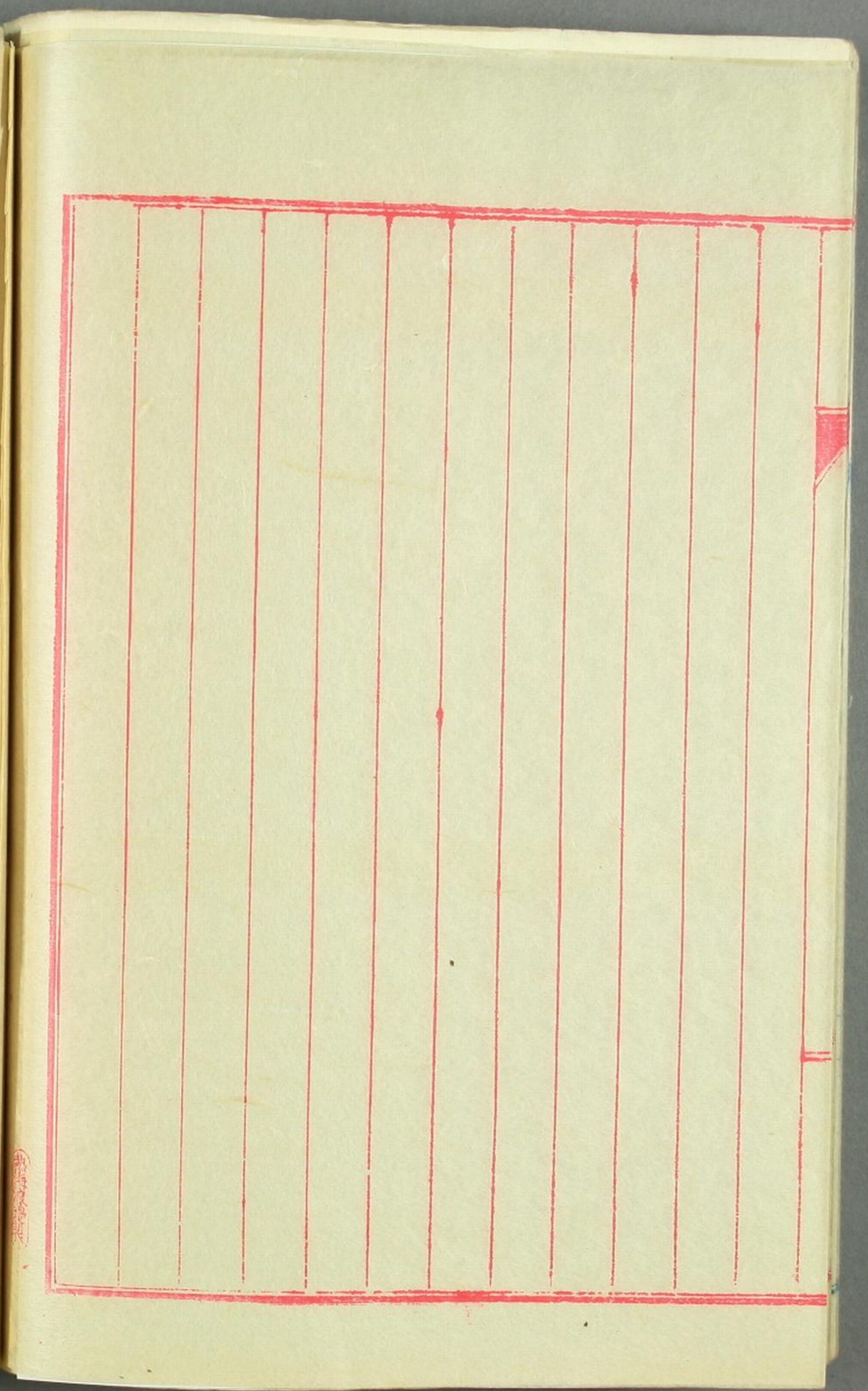
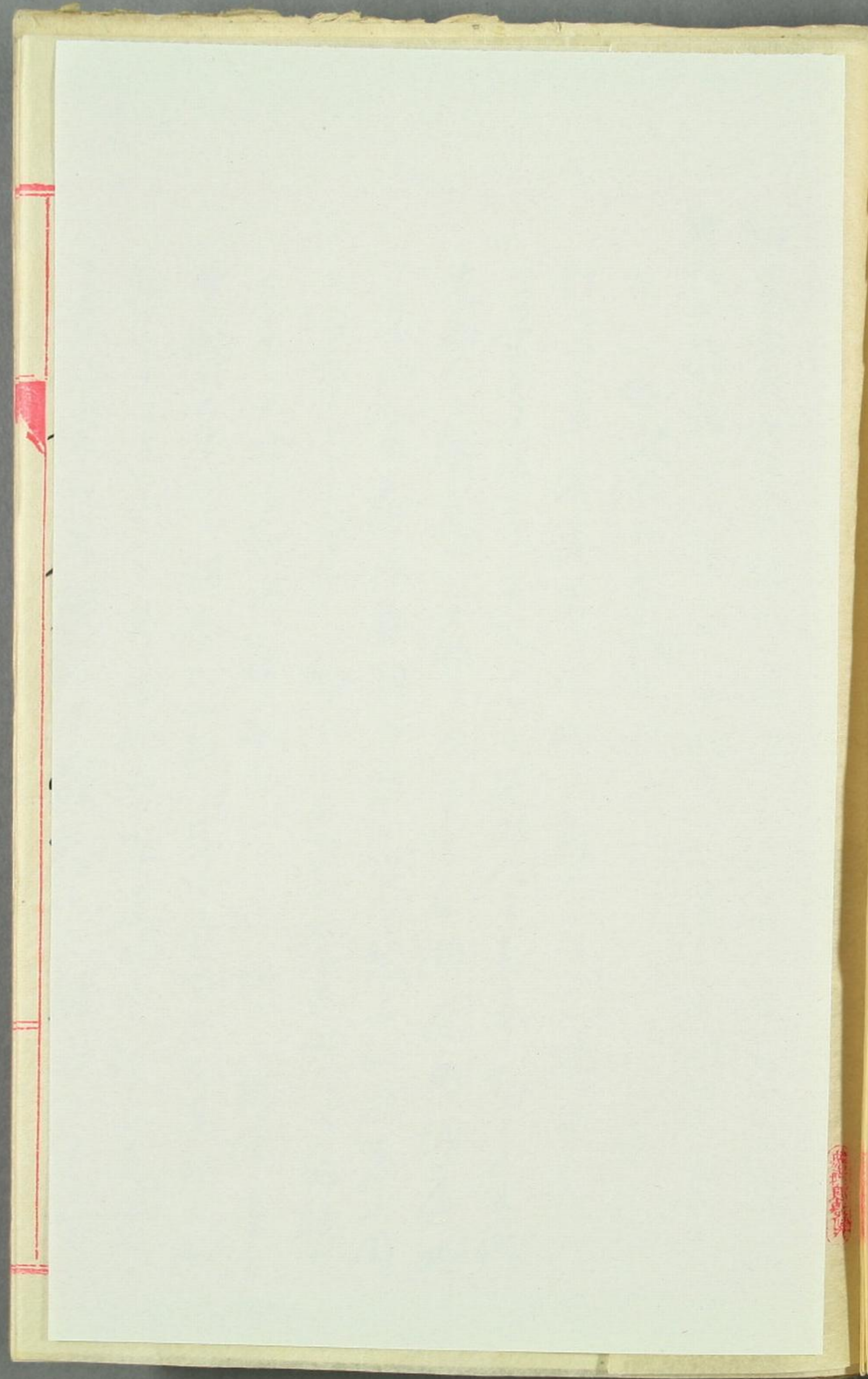
めを待たせりしものもぬるし 茶のむかしむかし  
は、あぢとくしあふとくし 茶はのちふふかふ方が  
あぢし 一口の玉露を飲むは味は  
いとまじきかむ新味ももまつのまじき  
私は茶はききむむの支湯を頂戴しつゝ  
え来ふ、いんをむむむむむむむむむむ  
つむむむむむむむむむむむむむむむむ  
あぢとくも茶教う出まふ、矢張酒すきむむむむむ  
むむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ  
のむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ  
一むむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ

とすのむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ  
とらむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ

女史のむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ  
のむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ

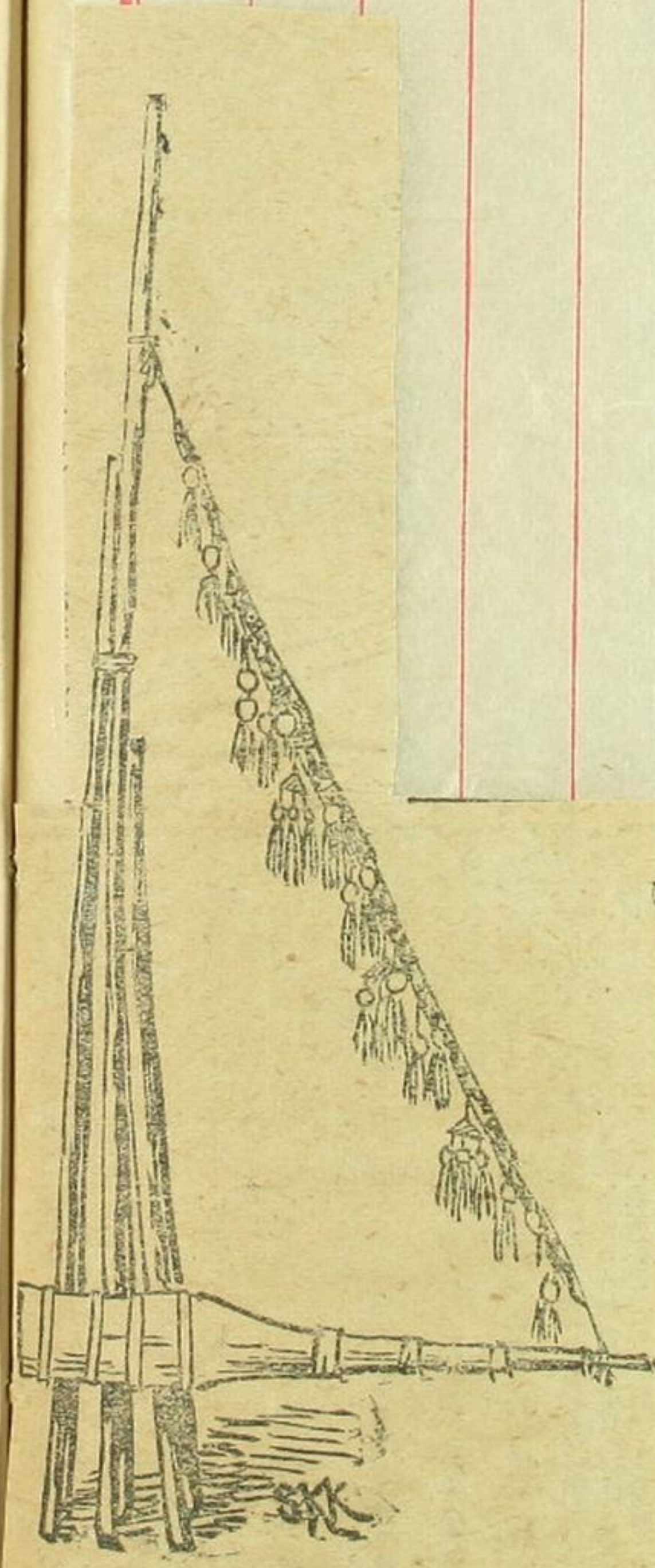
のむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ  
思ふよむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ  
本職談、聊主殿をまゑし 何のきもあせ  
おををむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ  
のむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ







一 頭髪より七ききまで四女とも之を束ねるるも其家名は  
 草木を以て名を呼ぶ事不危なること多きは都府  
 をりしを位するも河に支那人と混位するものあり  
 一 一般古昔より牛乳を嗜し居る古風なる者其  
 も古めしきもの多し法形を著る色佛交を以てし  
 祖先を祀拜する事古く揚がくる國を彼ボク  
 用ゆる事多しと云ふ事をも之を貴く有定番敷る



一 赤黒苗袴のきし需め初めを我國におゆりしもの  
 一 五分長四尺五寸花あらしと二本の作を以て作を  
 之を木箱に挿えて針ぬえ布片を連結し於袴の  
 巻込りのきり首首十枚の縫持物をのれんおるもの  
 一 玉を附して装飾をすも其おもひを印纏うもの  
 一 一え古代支那の移りてデザインの装飾を結草紙  
 化の古を信ぜりあるとも推おるものありて  
 一 男子は一般に之を用ひ未だ男子のきせり  
 一 装飾をきりおるものありて吹奏する  
 一 日風習するものありて婦人のついでに教人の  
 一 の男子は一般に之を奏するものありて教人の  
 一 一しと云ふが此れをきりて其きり油の品も清洲



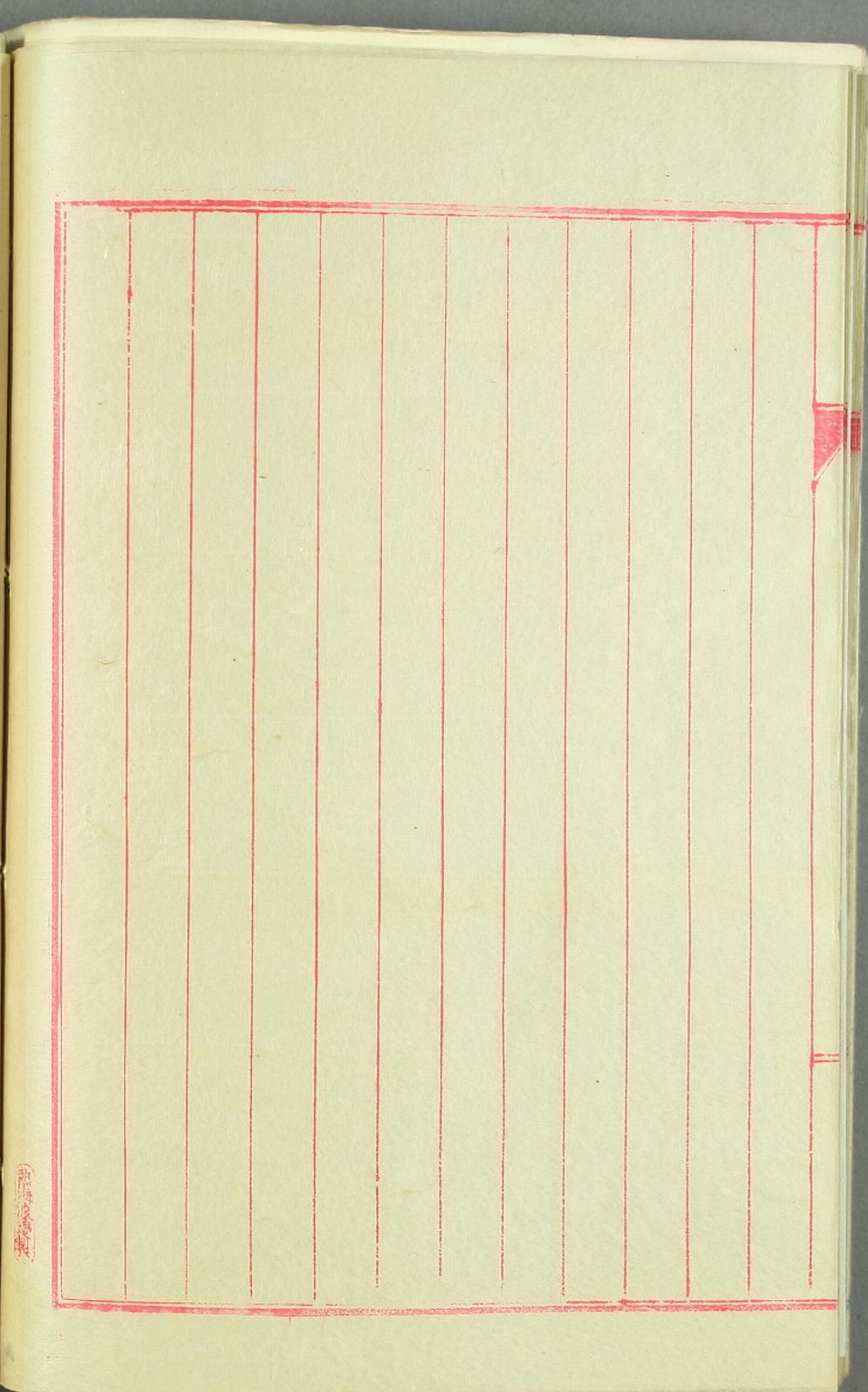
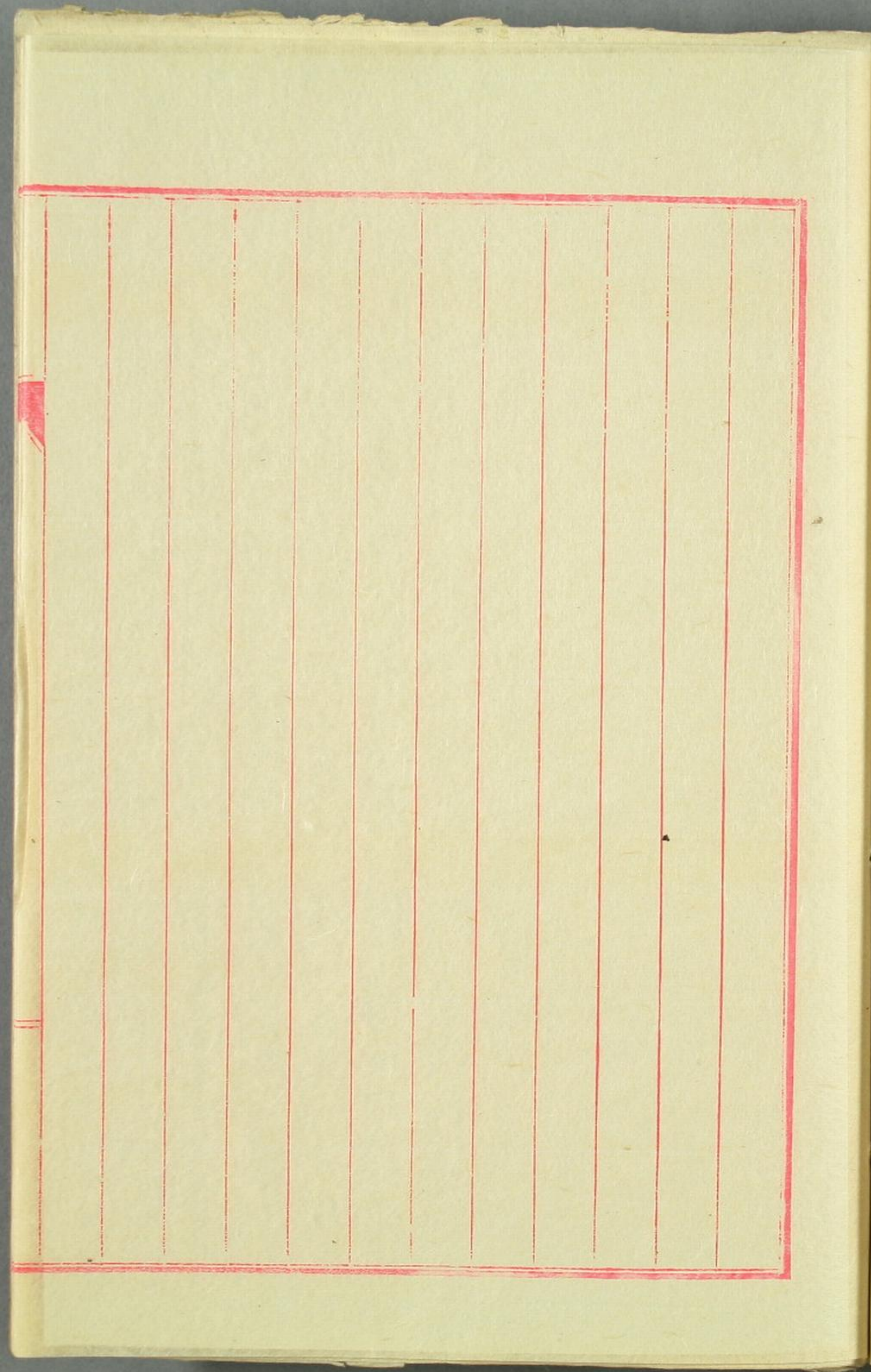
さういふことはい終つての儀とて一程儀の傍のあ  
こ又嫁入り方の教人合奏女子は之を和して踊躍  
す黔苗國語と之を記し右の如く記載す

八寨黒苗在都向府属女子以色布 金衣袖胸前绣  
錦方蔑之名曰都肚各寨於曠野之處建造一  
房曰馬郎房至晚未婚男女相聚於此飲者以  
牛酒致聘出嫁三日即帰寧或一年待外氏向婿  
索其頭錢不與或改嫁又有婿與女週俱死者  
尚女子之子索之名鬼頭錢也

假令現的支那の如くは孔子廟前の外に之  
之を用ひても古昔は一般之を用ひるは其の  
苗族に於けるは曰物に孔子の廟を以てするもの

苗語

は蓋し此の印釋の如くしるすしと亦未だ以ら  
しるすの如く交死するものなり



以下全て  
白紙

明  
昭  
三  
十  
六  
日  
三

月  
下  
浣  
起  
筆

才  
女  
吟  
久